

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

## ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

### 《人社系》

#### ●東北大学文学研究科歴史科学専攻

##### 「歴史資源アーカイブ国際高度学芸員養成計画」の事例

(具体的に何を実施したのか)

博物館、美術館、遺跡、文書館など国内外の多くの機関において、大学院生が研修・実習を行う機会を提供することができた。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生自身に研究プロジェクトを計画させ、申請書を作成させた上でそれを審査し、採択課題に経済的支援を与えることで、大学院生の主体的行動を促した。プロジェクトの支援を受けた課題については授業で成果発表を行い、プロジェクト遂行のための手法を共有することを試みた。なお、大学院生が実習・研修に出かけるために、会計処理が複雑となり、事務方の大きな協力を得た。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

GPが無ければ不可能な規模で、多くの大学院生を派遣することができた。特に、海外に派遣する豊富な機会が得られた。それにより、各院生はキュレーターやアーキビストに関する国際的な視野を得ることができた。また国際的なプロジェクトを計画・遂行することが当然であるという認識が共有されるという、大きな成果が得られた。

#### ●東北大学情報科学研究科

##### 「情報リテラシー教育専門職養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

情報リテラシーに専門的に取り組む研究機関は、世界・日本のどこにもないと思われる。その意味で本事業は特筆すべき活動であろう。しかし、関連して教育研究に取り組んでいる学術機関は少なくなく、積極的に視察・調査を行い、研修に参加した。たとえば、PODS (Professional Organizational Development Network in Higher Education)、UC Berkeley、Stanford University などがある。さらに、本プログラムでの事業や研究成果を広く内外に周知し理解してもらうために、とりわけ履修生に積極的に研究成果の発表を行ってもらった。その中には、CPATHi、復旦大学(上海)、The International Conference on Information in Secondary Schools: Evolution and Perspectives (in チュリッヒ) など、海外でも積極的に研究発表が行われた。そのような事業推進のために、可能な限り財政的支援を図った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

実践的課題を負う研究の質を高めるためには、現地での視察調査・研修等が極めて重要である。それを円滑に実施するためには、財政的支援は不可欠である。本プログラムでは、

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

その意味において柔軟に運用することができ、有益に活用することができた。また他方研究者・専門家などの評価をおおぐ必要がある。そのひとつの方策として、学会等での研究発表がある。そのための財政的バックアップを図ることができ、履修生の国内外での積極的な発表につながったと思われる。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

履修生のうち、社会人を除くほとんどが、国内・海外での研究発表や視察・調査に取り組むことができた。その経験は、研究の充実・発展のために多大な貢献を果たし、研究論文としてまとめられたものも多い。すでに社会人として働いている履修生もいる。プログラムの履修、教育研究が大いに役に立っていると思われる。

●京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻  
「研究と実務を架橋するフィールドスクール」の事例

(具体的に何を実施したのか)

国際協力のための実務基礎教育（研究発信トレーニング）を実施した。フィールドスクール実施前の国内事前研修として、英語による研究計画書の作成や英語によるプレゼンテーションのトレーニングをおこなった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

発表会には、ネイティブのアドバイザーとしてアジアやアフリカを対象にして調査研究をおこなっている外国人研究者を招き、建設的かつ具体的で詳細な講評をお願いした。さらに英文論文の校閲費用の支援もおこなった。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

2008年度～2010年度の3年間で計37名の院生が研究計画書作成のトレーニングを受けた。また計7名の院生が発表トレーニングを受けた。院生が、臨地調査を実施するうえで、指導教員や副指導教員だけではなく、外国人研究者からも研究計画にかかわる具体的かつ生産的なコメントを得られ、院生が臨地研究を実施していくうえで非常に有意義であったことが、海外での学会発表の数が年を追うごとに増加していること、また、全体の学会発表数に対する海外での発表の割合も増加傾向にあることから明らかになっており、大学院教育の改善・充実に大きく貢献した。プログラム終了後の現在では、研究科常設科目として開講されている。

●奈良女子大学人間文化研究科国際社会文化学専攻、社会生活環境学専攻  
「女性の高度な職業能力を開発する実践的教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

・海外における調査技術の修得および研究発表を実地に体験するための「フィールドサー

1. 特に効果的であり改善に資した事例  
E. 学習・研究環境の改善  
②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

ベイ」を新設し、受講学生に対して費用の一部を助成した。

- ・学会発表等に対して参加登録費等を対象に費用の一部助成した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・海外での調査技術を身に付けるフィールドサーベイ（実践基礎群）では、事前の準備を周到に行い、調査技術の効果的な修得を図っただけではなく、国際的なキャリア形成の一助とするために、海外の大学で研究結果の発表を行う等現地の大学院生等との研究交流も行うよう工夫した。
- ・学会発表における参加登録費等の助成に際しては、複数の応募者が同一の学会での発表に対して参加登録費等の助成申請があった場合には公平性に配慮し、応募者に共通すると考えられる費用を勘案した上で採択額を決定した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・大学院生の学会発表は、博士前期課程、後期課程ともに大幅に増加し、大学院生の学会発表への意欲の向上がみられた。

●上智大学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻  
「現地拠点活用による協働型地域研究者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

プログラム実施期間中の各学期に、現地調査支援を公募し、競争的選抜を経て、博士前期課程および博士後期課程の複数名の学生に調査実施に必要な交通費の一部を支援した。支援対象は平成20年度に10名、平成21年度春学期6名、秋学期7名、平成22年度春学期9名、秋学期7名に上った。公募にあたり学生は自らの調査計画を指導教員と相談しつつ立案し、採用決定後には必要な手続き書類を作成し、調査実施後には調査報告を執筆した。調査報告はウェブサイト上に掲載された後、冊子体で刊行され、後者は学内外の研究者に配布してフィードバックを請う一方、博士前期課程1年次必修の地域調査方法論の教材や本専攻入学を希望する学部学生向けの資料として利用した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

現地調査の立案、実施、成果とりまとめのいずれの段階においても、指導教員と密な連絡を保つよう、各段階で指導教員のフィードバック完了を確認する手続きを定める一方、指導教員に限らず、現地滞在中の教員や現地の研究者などに随時の指導を専攻として依頼し、学生の独自性を尊重しつつ、細やかに調査の進展状況を見守ることを心がけた。制度化されたフィールドワーク科目との連動を可能な限り行い、またカンボジアおよびエジプトに設けた海外拠点からの情報提供、研究者紹介などの支援も積極的に実施した。将来的に外部から長期調査支援の資金を獲得する練習を兼ねていることも学生に周知徹底した。

- |                           |
|---------------------------|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例       |
| E. 学習・研究環境の改善             |
| ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実 |

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

博士前期課程の学生については、フィールドワーク科目の制度化と併せて、修士論文に現地調査の内容が直接間接に反映される例がふえ、以前にもまして充実した内容の論文が増加した。博士後期課程の学生についても、調査支援が長期調査前後の予備調査、補足調査の実施にとって有効であった。この支援をきっかけに、博士前期課程から半年以上の現地調査を行う学生が複数現れたのもこれまでにないことであり、さらに学外からの長短期の留学および調査の助成獲得に成功した学生の数もふえた。成果の刊行は、学生にとって小さいながらも業績の蓄積に結びついて研究意欲を高め、受験希望者や新入の大学院学生からも将来の参考になるとの声が寄せられた。

## 〈理工農系〉

### ●岐阜大学連合獣医学研究科獣医学専攻

#### 「グローバル化に向けた実践獣医学教育の推進」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院生の国際学会への参加と発表を推進し、旅費等に関して支援した。また、短期間(平均3週間)の海外研修を奨励し、海外の短期研修においても旅費及び宿泊等について支援し、海外で活躍しやすい環境を整備した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生の国際学会発表に関する支援では、国際学会発表への参加登録料など、旅費及び宿泊費の経費以外に支出項目があり、学生への旅費等の支給にあたり不利益が被らないように配慮した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

国際学会参加や海外研修に関する支援プログラムを開始した当時は、応募者数が少なかったが、2年、3年と事業を進めるにつれて、応募者が激増し、大学院生が海外に行く機会が増加した。また、参加学生の中には、自信を持って英語で受け答えができる学生が最近目立ってきており、国際化に大きく貢献した。

### ●大阪大学理学研究科数学専攻

#### 「数物から社会に発信・発進する人材の育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

「プロジェクト研究支援」という名前の元、博士前期最終学年、博士後期の学生が自ら立てた計画に基づく研究に援助をおこなった。科学研究費の申請用紙と類似の書類を学生自らが作成し、それを元に研究計画の内容、実現可能性を判断し、結果に応じた支援をした。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

プロジェクト研究は、学生が属する研究室の研究の一環として行うのではなく、学生自らが研究計画を立てるものであることを学生に強調し、自らの力で研究計画を作成する能力を養うことにつとめた。また年度末には発表会を行い、研究がきちんと遂行できたかどうかを、学外の専門家の前で発表させた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

学生が自分で研究計画を立てる経験を積むことにより、独立した研究者として活動していく訓練を積むことができた。また研究内容を外部の専門家に審査される経験を積むことにより、自分の研究をより広い視点から見直し、説明する能力を養うことができた。

●奈良女子大学人間文化研究科物理科学専攻、複合現象科学専攻

「理系の実践型女性科学者育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

国内外の学会発表、実習について交通費の実費、宿泊費の実費を補助した。

派遣前に申請書を提出させ審査し、口頭発表すること、発表することが学生の研究の進展に有意義であることを条件に派遣した。

また、国内外への実習も実施した。件数は少ないものの学生にとっては特に国外での実習は有益であった。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

派遣前には申請書の提出を義務付け、学生が派遣によって何を得ようとするかを明確に理解させることに努めた。さらに派遣終了後は報告書の提出を義務付け、学生が派遣によって何を得たか又事前の予定との相違はどうであったかを意識させ、学習効果を上げる工夫をした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムによる派遣は3年間で150件を超え、その中で国外での発表は25件でありプログラム以前の3年間の1.5倍以上になった。

●広島大学生物圏科学研究科

「食料・環境系高度専門実践技術者養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- ・学生の国際会議等での発表およびインターンシップに対して支援を行い、学生による研究活動の国際性および主体性を涵養した。

1. 特に効果的であり改善に資した事例 E. 学習・研究環境の改善 ②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実
---

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・ 支援を受ける学生には本研究科で採用している外国人特任教員によるプレゼンテーション法の演習講義を受講すること、また国際学会発表・インターンシップ派遣支援を受けた学生には、成果報告書の提出と支援成果報告会での発表を義務付けた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

- ・ 本G P支援により、3年間で国際会議等の発表に45人を、インターンシップに8人を派遣することができた。

## 《医療系》

### ●京都大学薬学研究科

#### 「実践的創薬戦略家養成プログラム」の事例

(具体的に何を実施したのか)

教育コースの履修生のみならず、薬学研究科と生命科学研究科の大学院生に対して、国際学会における成果発表や国内外機関における共同研究を含む学外研鑽を奨励し、TA・RA費を支給することで経済的支援を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

本プログラムによるTA・RA費の支給は限定的であるため、教育コースの履修生で海外研究研鑽の希望者に対しては、学内運営費を活用した所属研究室からの経済的支援の拡充を図った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学院生の内向き志向と就職難の社会情勢を反映して、海外機関における研究研鑽の希望者は減少しているが、所属研究室と本プログラムによる協調した経済的支援により志望者が有る程度回復した。

### ●熊本大学医学教育部

#### 「臨床・基礎・社会医学一体型先端教育の実践」の事例

(具体的に何を実施したのか)

大学院学生の学術集会における研究発表を奨励するために、代謝・循環情報医学及び発生・再生医学に関連する国内学会もしくは国際学会に参加し研究成果発表を行うための交通費及び宿泊費の支援を行った。また、代謝・循環情報医学もしくは発生・再生医学に関連する医療・研究等を行っている海外の医療・教育・研究施設等へ大学院学生をサマーフェローシップとして1ヶ月程度派遣し、海外の研究グループとの共同研究等に参加させた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学会での筆頭演者としての口頭あるいはポスター発表を単位として認める演習科目「医学・生命科学演習」および「発生・再生医学演習 III」を設置し、大学院学生の学会発表を奨励した。交通費・宿泊費の支援に当たっては、博士課程の大学院学生を対象に広く募集を行い、研究の意義等をアピールする申請書を提出させた。合同プログラム運営委員会において書類審査を行い採否を決定した。派遣終了後にはレポートを提出させ、他の大学院学生にも参考となるよう、国際学会発表とサマーフェロシップに関するそれぞれのレポートは教育プログラムのホームページで公開した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

平成 20～22 年度において、合計 64 件の国内学会発表と 27 件の国際学会発表について支援を行った。大学院学生が全国的あるいは国際的な舞台上で自らの研究成果を発表する意欲を醸成し、それを実際に経験させることで、研究に対するモチベーションの昂揚に大きく寄与した。また、英国及び米国の医療・教育・研究施設に対して 4 件のサマーフェロシップ派遣を行った。共同研究プロジェクトに関する実験の実施、講義や研究室カンファレンスへの参加、臨床研修プログラムへの参加などを通して、大学院学生がグローバルな視点を獲得し、研究・医療活動のモチベーションとスキルを向上させることに貢献した。